

道徳科の特質を問い直す

～私の発言要旨～

橋本ひろみ

自己紹介：道徳の授業の「二つの「おもしろい！」」

その一つは、道徳の授業は奥が深くておもしろいということです。

道徳が道徳科になったころ、「道徳の授業が同じパターンばかりで形骸化している」という意見がありました。そのときに荻原武雄先生が「はたして本当にそうだろうか」とお考えを論文で述べられました。私は自分の思いと同じだったので、嬉しくて論文に向かって拍手をしたことがあります。道徳の授業は実に奥が深く、研究する者にとっておもしろいものであるということです。

二つ目は、本日のテーマの「特質」を踏まえた授業は子どもにとっておもしろいということです。

何年も前のクラスの子ども達も「道徳はおもしろい」と言ってくれました。しかし、私がもっと学んで力を付けていくにつれ、子ども達の「おもしろい」という声がさらに大きくなったように感じています。

「特質を踏まえた授業はおもしろい！」

現状と課題：内面的資質を高める話し合いになっているか

道徳科の目標に「道徳的価値について理解する」とあります。教材を読んで、話し合っ、他者の感じ方、考え方に触れ、自分の感じ方、考え方を広げ深めていくという対話的な学びを通して、他者から押しつけられるのではなく、自分自身で聞いて考えて見つめて、自己の生き方を考えることにつなげられる価値観を構築していく、つまり、内面的資質を高めていくことが、道徳科の大きな特質です。

しかし、はたして本当に内面的な資質が高められるような対話的な学び、話し合いになっているだろうかという課題です。「発表はしているけれど話し合っていない」という指摘は何十年前前からありました。（学級会や算数とは違った道徳ならではの話し合いの難しさだと考えています。）

この道徳科での話し合い活動の問題は、長年の自分の課題でもありました。また、この課題は自分だけの課題ではないとも考えています。

課題解決の方策：教員のレディネスに合ったステップで授業改善を

子どもの学習に必要なレディネスは教員にもあると考えています。

自分も初任の頃は、導入、展開、終末をつなげることが難しかったです。授業前に一生懸命に作った場面絵を黒板に貼るタイミングがつかめず、授業中におろおろしていました。今の私には簡単なことでも、その頃はすごく難しかったのです。

板書もそうです。発問カードは黒板の一番上から下の床まで付くような長いものを貼っていましたし、子どもの発言をそのまま長く書いていました。授業が終わると、レポート用紙に字が並ぶような文字だけの板書になっていました。

でも、少しずつ学び、ある程度形になってくると、今度は、毎時間同じような授業の繰り返しになって面白さが足りないと感じるようになりました。先ほど「授業が形骸化している」というお話をさせていただきましたが、その言葉に賛同される若い先生もいらっしゃいます。当時の私と同じ思いだったのだろうと推測しています。

ところが、その先があるんです。その先がおも

しろいのです。

私の授業が変わった**ステップ その1**は、

「指導観」ということをご指導いただいて、実践するようになってから、私の授業はガラッと大きく変わりました。

それまでは、子どもの発言を聞いているうちに、どんどんねらいから外れていき、「あれ？ねらいはなんだっけ？」と、分からなくなってしまいうこともありました。指導観をしっかりとって授業に臨むようになってからは、子どもの発言の聞き方も変わりましたし、板書も変わりました。授業もおもしろくなりました。私があちこちで指導観の大切さを述べているのは、自分の授業が大きく変わったきっかけになったからです。

次に、発言している子どもだけをじっと見つめて話を聞くことをやめてみました。若い頃、「発言している子どもの目を見て聞くのですよ。」と先輩から教えていただき、ずっとそうしてきました。しかし、教室全体が見えないのです。発言していない子どもが、どんな様子でその子の話を聞いているのか、全く分かりませんでした。

「守破離」の「破」ですね。見つめるのをやめてみたら、うなずいている子、首をかしげている子、拍手をしている子、難しい顔をしている子、よく見えるのです。その様子で指名をし、話し合いにつなげることができるようになりました。

次に、**ステップ その2**です、

板書を私一人で作るのをやめました。

「授業後の板書で先生の力が分かるから、どれだけ板書できるかしっかりやらなくちゃ」みたいに思っていたのですね。でも、話し合いながら、子どもに「今のA子ちゃんの考え、黒板になんて書こうか」と相談する、いえ、私の中ではなんて書こうかだいたい決まっているんです。でも子どもにそう投げかけるのです。ときには「どこに書こうか」と相談して、一緒に板書を作っていくようにしました。1年生でもできました。「その言葉は大事だから黄色で書いてください。」なん

ていう1年生もいました。それが結構当たっているのです。話し合いがおもしろくなりました。

ステップ その3は、

「反応する」ことを指導するようになったことです。先ほどの浅見調査官のご講演の中の「令和の日本型学校教育」のお話で、「協働」というお言葉ありました。

私は「道徳の授業で全く発言しないで黙っている子がいても、聞いているし、考えているから、それでいい」とずっと思っていました。強要することは嫌だったのですね。

ところが、世田谷区立池之上小学校で算数の研究を始めて、友達の意見に反応して話し合いを深めることを全校で取り組んだのです。この「反応」というのは、うなずくこと、「そうか」「なるほど」「わかった」などつぶやくこと、ハンドサインで考えを表すことなどです。「黙って座ってちゃだめ。反応して」と徹底的に力を入れて指導しました。しかし、私は「算数の反応は道徳にはそぐわないだろうな」と感じていました。

ところが、3年生の子どもたちは、道徳の授業でもちゃんと反応するようになったのです。しかも、道徳授業で大事にしている「友達の考えを否定しない」とか「間違いはない」という、それまでの指導をちゃんと踏まえて、算数とは違う反応をそれぞれしてきたのです。

池之上小のハンドサインでは、「グーが同じ考えを表す」と統一されていますが、普段、発言を全くしない女の子が友達の発言が終わった途端に目をキラキラさせながら、ものすごい勢いでグーを挙げました。私は思わず指名してしまいましたら、その子は涙目になってしまいました。

黙って座っていた子どもが、話し合いに参加し、何らかの方法で自分の思いを表出できるようになったのです。クラスみんなで話し合う雰囲気が出てきて、話し合いはおもしろくなりました。発言した子どもも「みんながうなずいたり、反応したりしてくれると話しやすいし、うれしい。」と言って

いました。反応の指導で、話し合いは変わってきたと感じています。

以上、自分の授業が変わったステップをお話ししました。

指導教諭として、区の初任者研修や推進教師の研修など、様々な経験の方にお話しする機会をいただいていたのですが、それぞれの課題に合った話をするように心がけていました。自分が得たものをこれからも機会があれば広めていきたいと考えています。

参加された方からのご質問にお答えして

ワークシートを書かせないで、どうやって評価をしているのですか？

いつも書かせないわけではありません。先ほど

の私の授業の紹介で「ワークシートを書かせる時間がもったいない」と言ったのは、おそらく、時間をとってワークシートに向かわせても、振り返ることが難しい内容項目だと指導の意図通りにはいかないと考えたからだと思います。普段、意識して生活することが少ない内容項目もありますので、そのような場合には、初めから思いつく子どもにだけ発表してもらって、場対象を広げる指導を行う方が効果があると判断したのでしょう。

いずれにしても、評価はワークシートだけで行うものではなく、授業中の発言や板書、先ほどの女の子のように、「このときに、こう手を挙げた」と記録しておくことも評価になると考えています。

以上